

# いのちと地域を守る

## 避難所 間仕切り

キーワードは…

# 軽

い素材

# 高

さ工夫

# 安

心提供

災害発生後、多くの被災者が共同生活する避難所で、一定のプライバシーを確保するために紙製の間仕切りが大活躍している。東日本大震災後も熊本地震や西日本豪雨で導入され、軽くて丈夫な紙製品の特徴を生かし、被災者のストレスを和らげる工夫が随所に見られる。

## 考える

世界で活躍する建築家の坂茂さん(61)が代表を務めるNPO法人ボランティア・アーキテクト・ネットワーク(東京)は、紙製のパイプを組み合わせて作る間仕切りセットを避難所に無償提供する活動を展開している。

1セットは2段四方で高さも2段。紙製パイプを柱と梁に使い、梁に木綿布を通して四方のカーテンを開ければ周囲から遮られた個室ができ、プライバシーを確保できる。セットを複数つなげれば、大空間を確保することも可能だ。

活動は2004年の新潟県中越地震を機に始まった。当初は厚いボードで囲ったパイプだったが、開放感や組み立てやすさを考え、東日本大震災で現在の形に落ち着いた。

## 大きい空間も確保可能

### 紙製パイプとカーテンで個室



西日本豪雨の避難所で設置された高さ1.5mの間仕切り(ボランティア・アーキテクト・ネットワーク提供)

## 余震を想定し壁1メートルに

### 強化段ボールヘアピンで連結



東日本大震災で配布された高さ1.5mの間仕切り(11年4月、石巻市(今野さん提供))

一方、あえて高さ1.5mの間仕切りを提供してきた企業が石巻市にある。同市桃生町の梱包資材会社(今野樹包)だ。

今野英樹社長(46)は「災害時に強化段ボールを何とかが役に立たない」と震災前から考え続けていた。中越地震などで避難所がすし詰め状態になり、車中泊でエコノミークラス症候群になる被災者のニュースが頭に残っていたという。

震災発生後の11年3月、間仕切り用に縦1段、横幅2段の強化段ボール4000枚を石巻市内の複数の避難所に配った。ヘアピンで連結できるなど簡単に設置できるのが利点の一つだ。

高さが1.5mあれば、座ると周囲の視線は気にならない。今野さんは、当時頻発していた余震を踏まえ、逃げようとして立ち上がった時に周囲が見えないとパニックになると判断。「高さ1.5mは低い」と

## 探る

尚綱学院大教授

水田 恵三さん



みすた けいさく 東北大学大学院文学研究科博士課程修了。尚綱学院大教授を経て、03年から現職。14、17年度に副学長。18年4月から大学院総合人間科学研究科長。専門は社会心理学。広島県出身。60歳。

## 復興スピードに直結

### コミュニティの重要性

東日本大震災以降、被災各地の復興の様子を見ると、行政、地域住民、外部支援者が三者一体となって取り組む地域ほど復興のスピードが速いことが分かってきた。あらためて地域コミュニティの重要性に着目したい。

岩沼市の死者・行方不明者は計87人(関連死含む)

東北大震災以降、被災各地の復興の様子を見ると、行政、地域住民、外部支援者が三者一体となって取り組む地域ほど復興のスピードが速いことが分かってきた。あらためて地域コミュニティの重要性に着目したい。

岩沼市の死者・行方不明者は計87人(関連死含む)

東北大震災以降、被災各地の復興の様子を見ると、行政、地域住民、外部支援者が三者一体となって取り組む地域ほど復興のスピードが速いことが分かってきた。あらためて地域コミュニティの重要性に着目したい。

岩沼市の死者・行方不明者は計87人(関連死含む)

## 予想外、背後から津波襲来(気仙沼市)



気仙沼高3階の会議室は、嵐の海に浮かんだ船のように揺られ、出席者は机の下に避難しました。幸い校舎は耐震工事を終えたばかりで、倒壊はしなかったと思っていました。

当時、地元新聞社(三陸新報社)の取締役編集委員で、真先に号外発行が頭に浮かびました。状況の把握が先だと思い、家族も心配だったので山道を通り自宅に向かいました。



近藤公人さん

## 記録誌で怖さ後世へ



気仙沼市高台(当時)に押し寄せた津波。校舎4階まで浸水した。2011年3月11日(気仙沼市津波路上高台(山田茂樹)提供)

1960年のチリ地震津波以降、津波は大島最南端の龍舞崎と気仙沼波路上の岩井崎の間から来ると信じられていた。確かにその方向から第一波が見えたのですが、背後でバリバリ、ドーンという音が鳴り響きました。

妹が女房先に突然として立っていました。小言が舞い、寒いだろうと「車に乗ってエンジンをかけておけ」と言い残し、海が見えなくなる高台に車移動しました。

妹が女房先に突然として立っていました。小言が舞い、寒いだろうと「車に乗ってエンジンをかけておけ」と言い残し、海が見えなくなる高台に車移動しました。

## 外部の意見聞く機会必要

男鹿市・北陽小学校長 佐藤 忠之さん(59)



男鹿市は1983年の日本海中部地震で大きな被害を受けました。35年がたちましたが、地域に生きる者として教訓を受け継いでいかなくてはなりません。

毎年3回の防災訓練をはじめ、震災当時を知る方に語り部をしてもらうなど防災意識の向上を図っています。男鹿市と連携しての防災教室や秋田大の専門家を招いての講座など外部の声を聞く機会をつくるよう心掛けています。

東日本大震災では想定外の津波で多くの方が犠牲になりました。さまざまな意見を取り入れ、想定外の場面でも行動ができるよう取り組んでいます。

## 現場から

大崎市馬寄行政区長 遠藤 護さん(75)



に、どこにどうやって避難するのか、あらかじめ確認する作業です。昼か夜か、家族がそろっているかなどで、状況は違います。いろいろなことを想定し、事前に家庭や隣近所、地区で話し合っておくことが大切だと思います。地区から犠牲者を一人も出さないようにしたいです。

## マイタイムライン作成を

約60世帯ある馬寄行政区は、新江合川がそばを流れています。近年は各地で水害も多く、川の越水時に備え、避難のタイミングなどを時系列で定めるタイムラインの個人版「マイタイムライン」の作成が有効と考え、防災担当者や準備を進めています。行政の避難準備情報を合図